

日本中國學會報 第七十二集
二〇二〇年十月十日 發行 拔刷

北宋文學における啄木鳥——寄託の深層化

早川太基

北宋文學における啄木鳥——寄託の深層化

早川太基

一、文學の題材としての啄木鳥

中國文學における啄木鳥の詠まれかたの變遷を探るのは、「詠物」の問題であると同時に、人の情感や思考を、どのように事物に託して表現するかが問われる。「寄託」の發展史を描きだすことに重なり合う。ことに北宋の啄木鳥を詠んだ作品は、前代に見られぬ質量を誇り、表現方法の發達および多様化して膨らみゆくイメージは、分析に値する。

啄木鳥という鳥は、その名のごとく長い嘴を用いて樹木を叩き、内側に巣くう蟲を取りだして餌とする獨特の生態を持つ。森に響きわたる高音を發するため古くから注目され、『爾雅』「釋鳥」にも「鷲たぐはく」^①「鷲たぐはく木」という名が出現する。たとえば唐宋以前の民間の俗信もまた全てこの特徴に由来し、雷神の「採藥吏」と見なされ、齟齬の薬となり、啄木鳥が嘴をもちいて靈力のある符號を畫くと蟲がひとりで飛び出し、^②盗人がその符號を覺えておけば扉を開ける時のまじないになる^③などが列擧できる。

また啄木鳥を考えるうえで重要なのは「蟲蠹」の意象である。それ

は單純に自然界の樹木を食らうがゆえの負のイメージのみならず、例えば『左傳』襄公二十二年に「國蠹」という表現があり、『韓非子』「五蠹」はまさに邦家に巣くう害蟲の意であるように、先秦以來すでに社會性・政治性を付與され、歴代の詩文にも「邦蠹」「政蠹」「凶蠹」「民蠹」などの語彙が散見される。

このような樹に巢食う蟲を叩き出して退治する行爲は、以下に例を擧げるように、概ねの啄木鳥を詠んだ文學作品に共通する基本的圖式であり、つまりは比興・寄託の根幹をなす。では先ずは、宋代までの軌跡を追ってゆこう。

二、宋代以前の啄木鳥の詠まれかた

中國文學において啄木鳥を詠んだ最古の例は、『藝文類聚』に引くところの晉詩二首^④に遡り、それぞれ左氏と傅玄の作である。劉宋の袁淑（四〇八―四五三）の編纂になる『排諧集』に收める左氏の詩は、啄木鳥の「飢則啄樹、暮則巢宿（飢うれば則ち樹を啄み、暮るれば則ち巢宿す）」という自給自足の生活のなかに「性清者榮、性濁者辱（性清き者は榮え、性濁れる者は辱めらる）」という人生の哲理を見いだす内容であ

る。また晉の傅玄(二一七―七八)の詩は「啄木高翔鳴啾啾、飄搖林薄著桑槐(啄木高翔して鳴くこと啾啾たり、林薄を飄搖して桑槐に著く)」という森を飛びめぐつて樹を叩く描寫から始まる詠物であり、その存在は「嚶嚶嚶嚶聲正悲、專爲萬物作倡俳(嚶嚶、嚶嚶、聲正に悲し、専ら萬物の爲に倡俳と作る)」のように悲しき音聲を擧げ、萬物のための藝人のような位置にあると評する。

左氏と傅玄の詩では、いずれも啄木鳥の姿のみが詠われる。前者は自給自足を賛美するが、この特徴は自然界の鳥獸ならば例外なく當てはまるわけであり、啄木鳥の獨自性が十分に發揮されたとは言いがたく、類似の作品は後世には極めて少ない。後者の生態描寫は更に詳細であつて後世の描きかたに繋がるが、何らかの寄託とも讀める「萬物の倡俳」という表現は唐突であり、本處にのみ見られる。つまり兩者の文學的影響は、あくまで限定的である。

降つて唐代になると、啄木鳥の蟲を捉える特性にむけて視點が絞られる。たとえば大曆四年(七六九)、尙書郎の鮑防(七二―一九〇)等十一人の文人が、浙江の雲門寺に會した時、四言の偈頌を作つたが、そのなかの作者闕名の「山啄木偈」には「爾禽啄木、惡蠹傷木。愈木無病、巢枝自足(爾禽なる啄木、蠹の木を傷ましむるを惡む。木を愈して病無く、枝に巢くひて自ら足る)」とある。蟲退治に成功したのちに悠然として樹の枝に棲まう安らぎとは、恐らく煩惱を克服した安禪の境地を詠うのだろう。

これより後、啄木鳥と蟲との關係性はさらにクローズアップされ、元白に到つて寓意の要素が初めて顯著になる。元稹(七七九―八三二)「有鳥二十章」其八は啄木鳥を主題とし、白樂天(七七二―八四六)「寓意詩五首」其五は木くい蟲を中心テーマとし、ちようど正反對の視點

からの寓意詩になつてゐる。元詩では「偏啄鄧林求一蟲、蟲孔未穿長背禿。木皮已穴蟲在心、蟲蝕木心根柢覆(偏に鄧林を啄みて一蟲を求め、蟲孔未だ穿たざるに長背禿ぐ。木皮已に穴あり蟲心に在り、蟲は木心を蝕みて根柢覆る)」と詠まれ、白詩では「借問蟲何食、食心不食皮。豈無啄木鳥、背長將何爲(借問す蟲何をか食らふ、心を食らひて皮を食らはず。豈に啄木鳥無からんや、背長きも將た何をか爲さん)」とあり、どちらにも跳梁跋扈する蟲と、それに對しては無力な啄木鳥が描かれる。南宋の楊萬里の詩のなかにも詩想の類型が見られるのは、元白を學んだ痕跡であろう。これらの詩のなかで啄木鳥は效果に乏しいとはいへ、基本的には害蟲の驅除を試みる存在であり、たとえば中晩唐のころの詩にもはつきりと「終日與君除蠹害(終日君の與に蠹害を除く)」と、善なるイメージで詠まれる。

晩唐には、従前の「啄木鳥と蟲」の枠組みには収まらない内容の詩が登場する。詩僧齊己(八六三―九三七)の「啄木」には、次のように詠われる。

啄木啄木	啄木啄木
鳴林響壑	林に鳴きて壑に響く
貪心既緣	貪心既に緣り
利嘴斯鑿	利嘴斯れ鑿つ
有朽百尺	朽ちたる百尺有り
微蟲斯宅	微蟲斯れ宅まふ
以啄去害	啄むを以て害を去らんとし
啄更彌劇	啄むこと更に彌よ劇し
層崖豫章	層崖の豫章
聳幹蒼蒼	聳幹蒼蒼たり

母縱爾啄

爾が啄むを縦にし

殘我棟梁

我が棟梁を殘ふこと母れ

冒頭では「鳴」「響」という字を用い、聽覺から切り込む。三句目

において啄木鳥の蟲を啄む行爲を「貪心」というマイナスの言葉によつて非難するところから、この作品の明確な主張が始まる。啄木鳥を

「啄むをもつて害を去らんと」する存在として看做すのは一面的であり、じつは同時に樹木本體を「微蟲」と同等に傷めてしまい、努力すればするほど弊害は甚だしくなる。最後は、斷崖に聳える豫章は「棟梁」の良材なのだから、損なつてはならないと結ぶ。

以上のように西晉から唐代へと時代が下がるにつれて、啄木鳥特有の生態をうまく捉えた表現方式が發達する。まず挙げられるのは「啄木鳥と蟲」の食者と被食者との圖式であり、啄木鳥は基本的には悪しき蟲を退治する存在である。そして次に、傷つけられる樹木の要素を入れた「啄木鳥と蟲と樹木」の視點の成立により、啄木鳥の行爲の捉えかたについて矛盾した二面性が提示された。

三、北宋中期までの發展

唐代までに展開された啄木鳥の寓意の要素は、宋詩では大きな發展を遂げる。最初にあらわれるのは、邪悪なる害蟲を成敗してゆく正義の象徴としてのイメージを前代に比類なきほどに高め、恰もいわゆる北宋士大夫の使命感の高揚を想起させる作品である。王禹偁（九五四—一〇〇二）の「啄木詞」に詠われる啄木鳥は、冒頭から颯爽とした姿として描かれる。

淮南啄木大如鷗

淮南の啄木 大いなること鷗の如く

頂似仙鶴堆丹砂

頂は仙鶴に似て丹砂 堆し

背長數寸勁如鐵

背の長さ數寸にして勁きこと鐵のごとく

丁丁亂鑿乾枯查

丁丁として亂れ鑿つ乾枯の查

黃柑紅桃多有蠹

黃柑紅桃多くは蠹有り

受命鳳皇須破柱

受命の鳳皇須く柱を破るべし

何當更與繡衣裳

何か當に更に繡衣裳と與に

羽族橫飛作持斧

羽族 横に飛びて持斧と作るべき

王禹偁は至道元年（九九五）に朝政誹謗の罪によつて「淮南」の滁州に左遷されており、本詩はこの時期の作品であろう。「黃柑紅桃」などの甘い實のなる樹木には、天子の象徴である「受命の鳳皇」に背く害蟲が巢くう。そこで登場するのが「勁きこと鐵のごとく」き嘴を持つ啄木鳥であり、『後漢書』「黨錮・李膺傳」の「破柱求姦」の典故のように、樹のなかの蟲を退治できる。そして、いつの日にか『漢書』「王訴傳」の暴勝之のような「繡衣の御史」とともに、配下の「持斧」として他の鳥たちと自在に飛翔しようと期待を寄せる。

このような善なる存在としての啄木鳥はその後も受けつがれ、たとえば黃庶（一〇一九—一〇五八）の「庭樹聯句」の「老蠹病其中、啄木爲良醫（老蠹 其の中を病ましめ、啄木 良醫たり）」という醫師のイメージに連なる。また韓琦（一〇〇八—一〇七五）「啄木」では、蟲蠹のことを「彼實害珍材、盡殄此非酷（彼れ實に珍材を害し、盡く殄くすも此れ酷なるに非ず）」と斷罪するのに對し、啄木鳥を「忽爾破姦穴、種類無遺族。内孽固難辨、一發知潛伏（忽爾として姦穴を破り、種類（族）して遺族なし。内孽 固より辨じ難きも、一發 潛伏を知る）」と害蟲の搜索と撲滅にかけての能力を高く評價している。詩の最後は、もし害蟲以外のものも食べられたなら「杞梓任陰賊、長啄罷攻觸（杞梓 陰賊に任せ、長啄 攻觸を罷めん）」と樹木など蟲たちにくれてやり、もつと氣樂な生

活が送れようという想像で結ばれる。これは裏をかえせば害蟲驅除という正義の執行は、啄木鳥にとつて決して譲れぬ天性という主張であり、どこかに作者自身の姿を重ねるのだから。

善なる存在の象徴としての啄木鳥のイメージを、宋代文壇において塗り替えたのは、魏野（九六〇—一〇二九）の五律「啄木鳥二首」である。まずは其一を見てみよう。

爪利嘴還剛 爪利くして嘴還た剛なり

殘陽啄更忙 殘陽啄むこと更に忙し

千林蠹如盡 千林蠹如し盡くれば

一腹餒何妨 一腹餓うるも何ぞ妨げん

形小過槐陌 形小くして槐陌を過ぎ

聲高近草堂 聲高くして草堂に近し

豈同閑燕雀 豈に同じからんや閑なる燕雀の

唯解占雕梁 唯だ雕梁を占むるを解するに

夕方に至るまで必死に蟲を啄む描寫から始まり、頷聯では「千林蠹もし盡くれば、一腹餓うるも何ぞ妨げん」と、森林の木くい蟲さへ完全に退治できれば、その後の自分の餌など構わないと自己犠牲の精神を述べ、安樂を貪る「燕雀」とは異なるという自負を持つ。この魏野の作品は、宋代の詩壇では有名であり、司馬光（一〇一九—一〇八六）は『續詩話』において特にこの聯に注目して「詩人規戒之風」ありと述べ、また南宋の薛季宣（一一三四—一七三三）「啄木」でも「要能去蠹無遺種、寥落空林死便休（要し能く蠹を去りて遺種無からしむれば、空林に寥落たりて死して便ち休まん）」と詩意を用いる。次にあげる其二は調子を一轉させ、全く逆の角度から、啄木鳥を詠む。

亂繞園林啄 亂りに園林を繞りて啄み

北宋文學における啄木鳥

終朝意若何 終朝意若何^{いかん}

莫因饑不足 饑えて足らざるに因り

翻愛蠹偏多 翻^{かへ}て蠹の偏に多きを愛すること莫^なれ

渴映隣溪下 渴しては隣溪に映じて下り

驚從別樹過 驚きては別樹より過ぐ

辛勲詠還囑 辛勲詠じて還^また囑す

無損好枝柯 好き枝柯を損ずること無^なれ

まず破題として、首聯にて「終朝意若何」と、その行爲に對して疑義を挾んで問題提起する。重要なのは頷聯であり、「蠹の偏に多きを愛すること莫れ」と戒めている。これは本來ならば樹木を守るべきなのに、蟲を食らつて腹を滿たそうとし、もつと増えればよいという本末轉倒の願いを懐くことの危険性への指摘であり、遂には「好き枝柯を損ずる」結果となりかねない。

兩宋の際を生きた人物である陳巖肖（？—？）の『庚溪詩話』卷下では本詩について、司馬光の擧げた一首目の内容もさりながら、この二首目の頷聯こそが「規戒」の言葉であり、特に尾聯は「仁人之言」と稱贊できると述べる。さらに續けて「世之貪進、因媒孽他人以售己而傷及善類者、聞之亦少愧矣（世の進むを貪り、因て他人を媒孽し、以て己を售りて傷つけて善類に及ぶ者、之を聞くも亦た少愧ぢんかな）」と批評する。司馬光の視點は森林のために害を除く啄木鳥の使命感に注がれるが、陳巖肖は逆に、その行爲の副作用の生みだす被害を警告する言葉に、より深く共感する。司馬光の薨じた後、黨争に明け暮れる朝廷は迷走を極めるが、陳巖肖はその時代に生きたために、このような視點の差異が生まれるのだろうか。

以上のようにこの時期の啄木鳥を詠んだ詩はいずれも、啄木鳥と蟲

蠹との間の、食らい食らわれる關係性に基づいた作品である。しかし王禹偁「啄木詞」の系列において、啄木鳥に託されるのは正義に依據した希望であり、魏野「啄木鳥二首」に比較すると、ある意味では一面的である。魏野の詩は、おのれの勤めを果たすべく邁進する正義の鳥もまた一步間違えれば、あるいは裏を返せば、實はただの害鳥に他ならない皮肉な二面性を指し示す。勿論、同様の描きかたは晩唐の齊己「啄木」に遡るが、しかし全體の内容は、魏野による換骨奪胎を経て、より色濃く社會に對するメッセージの意味合いを持つており、事實として當時の讀者はそのように受けとめた。是において啄木鳥は、描きかたの方向性を問わず、「規戒」という評語に代表されるような濃密な政治性・社會性を備えたイメージを確固たるものとした。

このように啄木鳥に付與されたイメージは、やがて詩人たちの共有認識となった。北宋の治平年間（一〇六四―一〇六七）、吉州吉水の縣令の壓政を風刺して、馬道という布衣の人物が「啄木詩」を詠んだが、縣令はその詩を目にしたあとには従前の行政方法を改めたため、世人は馬道を讃えて「馬啄木」と呼んだという。問題はこの五律「啄木詩」の次のような内容である。

翠翎迎日動 翠翎 日を迎へて動き
紅嘴響煙蘿 紅嘴 煙蘿に響く
不顧泥丸及 顧みず 泥丸の及ぶを
唯貪得食多 唯だ貪る 食を得ることの多きを
才離枯朽木 才に 枯朽の木を離れ
又上最高柯 又た 最高の柯^こに上る
吳楚園林闊 吳楚 園林 闊く
茫茫爭奈何 茫茫として 爭^い奈何^{せん}

一見すると徹頭徹尾、啄木鳥の生態を描寫するのみであり、單純な詠物詩に異ならない。しかし縣令が、この内容を自己への批判として卽座に理解し、世人もまた喝采したのは、謂わば文壇に積み重ねられた「常識」がそう讀ませたわけである。この逸話からも、宋代も時代を降るにつれ、やがて啄木鳥というテーマが、社會的また政治的寓意を持つという共通意識が成立していったとわかる。

四、梅堯臣による展開——政争と音楽

以上見てきた作品は、「啄木鳥」「蟲蠹」「樹木」という三つの要素の範囲内で詠まれるが、北宋中期以降には更に複雑化した展開を見せる。同時に、啄木鳥に託される「社會性」は、官界の諸事情に直接に結びついてゆく。

この種の啄木鳥の政治的寓意を決定的に印象づけ、また大いに活用したのが梅堯臣（一〇〇二―一〇六〇）である。梅堯臣は、北宋の朝野を揺るがせた大事件に数えられる景祐年間の范仲淹（九八九―一〇五二）・歐陽脩（一〇〇七―一〇七二）等の左遷、そして慶曆年間の蘇舜欽（一〇〇八―一〇四八）等への處罰を、どちらも啄木鳥に關連させて詠いあげる。どちらの事件においても梅堯臣は、彈劾された側の人物と長年にわたる交友があった。まずは寶元元年（一〇三八）の作とされる五絶「啄木」（卷八²²）を見てみよう。

中園啄盡蠹 中園 蠹を啄み盡くし
未有出林飛 未だ 林を出でて飛ぶこと有らず
不識黃金彈 黃金の 彈を識らず
雙翎墜落暉 雙翎 落暉に墜つ
園林のなかで蟲退治に盡力した功勞者のはずの啄木鳥は、突然「黃

金の彈」によつて夕焼け空のもとに撃ち落されてしまふ。ただそれだけの内容であるために却つて意味深長であり、宋人の手になる『古今詩話』では、この詩の本事について「范文正公有勁節、知無不言、仁廟朝、數出外補〔范文正公勁節有り、知りて言はざる無く、仁廟の朝、數ば外補に出づ〕と述べており、まさに范仲淹を貶謫に追いこんだ朝廷を諷刺すると見なされた。²³ 本詩の内容には、同様に鳥たちに彈丸を浴びせる「挾丸子」が登場する韓愈「南山有高樹行」の影響が考えられるが、韓愈の作もまた長慶元年（八二二）の政争による李宗閔等の失脚を詠んだ作品である。

「仁廟」つまりは仁宗皇帝の景祐三年（一〇三六）の政變は、北宋政治のみならず文學史でも著名な事件である。この年の五月、改革派の范仲淹は、宰相の呂易簡と衝突した結果として知饒州に左遷され、抗議の聲を擧げた歐陽脩も越權行爲と見なされて夷陵の令として流竄ピソードの一つに、蔡襄が「四賢一不肖詩」を賦して四人を「四賢」と讃えると、世人は争つて詩を書き寫し、販賣した書肆は厚利を擧げたとあり、當時の民心の赴く所がわかる。²⁴ 梅堯臣はこの時に「彼鸞吟」（卷六）と題する詩を詠んでいる。

斷木喙雖長 斷木 喙くちばし 長しと雖も
不啄柏與松 柏と松とを啄まざ
松柏本堅直 松柏本と堅直
中心無蠹蟲 中心 蠹蟲 無し
廣庭木云美 廣庭 木美なりと云ふも
不與松柏比 松柏と比せず
臃腫質性虛 臃腫 質性 虚しく

北宋文學における啄木鳥

朽蝮招猛背 朽蝮 猛背を招く
主人赫然怒 主人 赫然として怒る
我愛爾何毀 我が愛するを 爾 何ぞ毀つ
彈射出窮山 彈射して窮山に出だし
群鳥亦相喜 群鳥も亦た相ひ喜ぶ
啁啾弄好音 啁啾として好音を弄び
自謂得天理 自ら謂へらく天理を得たりと
哀哉彼鸞禽 哀しい哉彼の鸞禽
吻血徒爲爾 吻血 徒らに爾か爲す

題と詩中の「鸞」とは啄木鳥であり、『爾雅』に見える字。「朽蝮」は木をむしばむ 蝮すくもむし。啄木鳥は決して、廣い庭園のなかでも「堅直」な樹木である松や柏を、啄んで傷つけはしない。蟲が湧いて啄まれるのは、他の見かけは立派でも中身はすかさずかな樹木の自ら招く災禍である。しかし庭園の主人は、啄木鳥が單に樹木を啄んで傷つけていると誤解して「赫然として怒」り、彈弓で撃つて深山に追いやる。すると他の鳥は何を勘違いしてか、當然の「天理」の報いであると鳴き交わして喜ぶ。最後に詩人は啄木鳥の冤罪を悼み、「哀しい哉」と嘆を發する。

この時期の梅堯臣は、啄木鳥の他にも様様な鳥の比興を用いて事件を詠っている。同年に作った鳥を詠ずる「靈鳥賦」（卷六）もまた失脚事件と直接に關連する作品であり、范仲淹に明哲保身を勧める内容である。范仲淹がこれに答えて書いた同名の「靈鳥賦」のなかの「寧鳴而死、不默而生（寧ろ鳴いて死すとも、黙して生きざらん）」の一句は、人口に膾炙する。また同年の梅堯臣「巧婦」（卷六）は、巧婦鳥を詠じた作であるが、巢作りの失敗の原因は、木の枝が弱かつたためだと

述べるのは、朝廷への諷刺である。

梅堯臣の啄木鳥の詩のなかで最も驚かされるのは、次に挙げる「李舍人淮南提刑」(卷十五)であり、その激越な痛罵の言辭は、文集のなかでも異例である。

啄木欲除蠹 啄木、蠹を除かんと欲し
蠹去樹亦撓 蠹去りて樹もまた撓む

何須食微蟲 何ぞ須ひん微蟲を食らふを
爾腹豈不飽 爾が腹豈に飽かざらんや

天下本無事 天下本と無事なるに
自爲庸人擾 自づから庸人のために擾さる

君實知古深 君實に古を知ること深ければ
終慙用傾巧 終に傾巧を用ふるを慙ぢん

啄木鳥が蟲をつつき出したあげくに「樹も亦た撓」んでしまふ。抑も蟲退治といつても「微蟲を食らふ」ような、あら捜しに過ぎない。

「天下本と無事なるに」敢えて波風を立てて問題を引きおこすのは「庸人」とし、古人の生きざまを深く知る君なのだから、卑劣なる行爲を恥じよと激しく責めたてる。

本詩は、慶曆五年(一〇四五)の作であり、タイトルの「李舍人」とは、前年十一月の蘇舜欽等の失脚事件において、直接の引金を引いた李定のことである。蘇舜欽は、「慶曆新政」の中心人物である宰相杜衍の女婿であり、當時は集賢殿校理として進奏院を監督していた。進奏院には、毎年祭祀のときに文書の反故紙を賣った金で宴會を催すという慣例があつた。

李定は當初、梅堯臣に頼んで紹介してもらい、蘇舜欽たちの宴會に加わろうとしたが、進士出身ではない「任子」という理由で皮肉を言

われて斷られた。⁽²⁶⁾ 蘇舜欽自身は、宰相蘇易簡の孫であるために一度は太廟齋郎という蔭位に就いたが、最終的には進士合格を果たした實力派である。恥辱を受けた李定は、宴會を開いたのは公金横領であると告訴した。結果として蘇舜欽は平民に落とされ、宴會に参加した者も十人以上が處罰される一大疑獄に發展した。⁽²⁷⁾ この梅堯臣も仲介者として關與した逸話が事實であれば、まさに豫期せずして渦中の人となつたわけであり、この「李舍人淮南提刑」の全く忌憚なく、直接に激しい怒りをぶつける口吻もよくわかる。

役所の慣例行事がいつの間にか公金横領事件にすり替わつた過程からもわかるように、これは本質的には政治抗争の一環であり、「慶曆新政」そのものに矛先を向ける事件であつた。内情に通じた歐陽脩が記すのは、蘇舜欽等の行爲を問題視した人物が最後には喜んで「吾一舉網盡之矣(吾れ一たび網を舉げて之を盡くせり)」と述べたことである。

同時期の梅堯臣による關連作品は、他にも「送蘇子美」(卷十四)「讀後漢書列傳」(卷十四)「送逐客王勝之不及遂至屠兒原」(卷十四)などがある。また「雜興」(卷十四)のなかで「主人有十客、共食一鼎珍。一客不得食、覆鼎傷衆賓(主人十客有り、共に食す一鼎の珍。一客食らふを得ず、鼎を覆して衆賓を傷つく)」と、謂わば食い物の恨みの恐ろしさを述べている。これらの一連の作品のなかでも「李舍人淮南提刑」は、もつとも激烈な表現であり、同時に啄木鳥という存在のマイナスイメージを甚だしく強調する。

以上の政争關連の詩では、いずれも啄木鳥の捉えかたが大きく異なり、梅堯臣の豊かな發想力がわかる。五絶「啄木」は功績ある者が狙い撃ちされる悲劇であり、「彼鷲吟」では庭園の主人から追い出される厄介者、そして「李舍人淮南提刑」では完全にかき回し屋の害鳥で

ある。既成のイメージを踏襲せず、啄木鳥独自の生態をうまく生かしつつ、自在に物語を展開する。

さらに梅堯臣による啄木鳥の詩を時系列に沿って追えば、次に登場するのは慶曆八年（一〇四八）の「啄木二首」（卷十八）の連作である。

題下の自注に「十二月十二日陪步後園所聞見（十二月十二日、後園に陪歩して聞見するところ）」とあるように、冬の庭園で見聞きしたものを描いた寫生の作である。まずは其一を見てみよう。

城頭啄枯楊 城頭 枯楊を啄み

城下啄枯桑 城下 枯桑を啄む

朝啄不停味 朝に啄みて、味しを停めず

暮啄不充腸 暮に啄みて腸に充たず

寒風正冽冽 寒風 正に冽冽たり

蠹穴蟲且殭 蠹穴 蟲且に殭れんとす

況茲園林迴 況や茲れ園林の迴なるをや

剝剝響何長 剝剝として響き何ぞ長き

この内容は自注に述べるように、直接に何かの寓意ではない。しかし「城頭」から「城下」まで、朝から晩まで、寒風のなかで終わりなき蟲とりに苦心する啄木鳥のすがたは様様な連想を生むに足る。木のなかの蟲さえもが寒さのあまり死にそうなのに、必死につき出そうと努力を重ねるのは何のためか。最後に「園林」の廣さを強調し、そのなかに今も絶え間なく樹木を叩く音が聞こえると詠むのは、啄木鳥の行爲を、終わりなき徒勞を宿命として負うものとして眺めているのだろうか。連作の二首目は、次にあげる五絶である。

食蠹非嫌蠹 蠹を食するは蠹を嫌ふに非ず
聲來古木高 聲來りて古木高し

誰將琵琶弄 誰か琵琶をもつて弄び
寫入相思槽 寫し入る相思の槽

詩中「相思」は琵琶の縁語である。唐詩では「相思曲」や「相思調」が琵琶によつて奏でられ、また「相思木」を用いて樂器が作られると詠まれるが、本詩では「槽」という樂器本體部分の名稱に續くため、後者の意味であろう。前半では啄木鳥の「蠹を食する」響きが樹上から聞こえたと述べ、後半では、いったい誰が啄木鳥の「聲」を模倣し、琵琶の曲にしたのかと問いかける。

本詩は、現存する文獻のなかでは最初に琵琶曲「啄木」に相關する内容を詠じた點で、重要な作品である。「啄木」は當時の新曲であり、啄木鳥の樹をつついて蟲を食べる生態を、撥を用いて樂器本體の「捍撥」を撃ち叩くなどして表現する珍しい奏法「啄木聲」を含む。

この九年後、樂曲「啄木」は突如として世間に流行し始める。嘉祐二年（一〇五七）十一月、まだ汴都の人にとつては耳新しい「啄木」を、友人宅において聴いた歐陽脩は三三句もの歌行體の作品「於劉功曹家見楊直講（褒）女奴彈琵琶戲作呈聖俞」を作り、梅堯臣も次韻して「依韻和永叔戲作」（卷二七）を詠んだ。翌年の夏に作られたと考えられる司馬光「同聖民過楊之美聽琵琶女奴彈啄木曲觀諸公所贈歌明日投此爲謝」もまた樂曲の感想を述べた三六句の雄篇である。これらの作品が宣傳効果を生んだのか、やがて一世を風靡した。

歐陽脩・梅堯臣・司馬光の三者が、流行初期の段階において琵琶曲「啄木」に多大なる關心をむけたのは注目し値する。梅堯臣は啄木鳥を詠じた詩において強烈な主張を繰り広げ、司馬光は魏野「啄木鳥」を批評し、歐陽脩は次節に分析する「啄木辭」を著わした。こう見ると樂曲「啄木」を廣めたのは、文壇において社會的・政治的な寓意を

帯びた「啄木鳥」を積極的に創作もしくは評價したのと同一人物となる。つまりは音楽流行の発信源と、綺麗なまでに重なる。

もつとも三者の著わした琵琶曲「啄木」関連の作品において主に述べられるのは、新奇な流行曲の雰囲気や、それを聴いて驚く賓客の姿である。啄木鳥自体は、麗らかな日ざしの降りそそぐ山林を自在に飛ぶ鳥という軽快なイメージで語られ、政治に関わる深刻な寓意性は必ずしも明確ではない。

この嘉祐二年（一〇五七）二月には翰林學士歐陽脩は、梅堯臣等と禮部考擧を司り、蘇軾・蘇轍・曾鞏等の人材を選び抜き、同時に天下の文風を一變せしめた。司馬光は久方ぶりに外任から東京にもどり、以後は出世コースを歩んだ。いわば三者ともに權勢の中樞に近く、比較的順調な時期であったことが、新奇な音楽に對して純粹に楽しむ餘裕をもたらしたのである。

とはいえ三者のなかで最も明確に政治的なメッセージとして讀み解ける啄木鳥を再三にわたり描いた梅堯臣が、同時に最も樂曲「啄木」について興味を示しているのは、一考に値する。この後にも、嘉祐四年（一〇五九）に梅堯臣は「次韻和永叔飲余家詠枯菊」（卷二九）にて「但能置酒與公酌、獨欠琵琶彈啄木（但だ能く酒を置いて公と酌む、獨り欠く琵琶の啄木を彈するを）」と述べているが、「木」が次韻の字とはいえ、わざわざ曲を聴けたらと希望を漏らすのは、よほど好尚に合したとわかる。その他にも「十五日雪三首（其一）」（卷二三）および「翠羽辭」（卷二三）があり、この三首に、既述の「依韻和永叔戲作」「啄木二首」を足せば計五首になる。一連の創作年代を時系列にすれば、政治的な啄木鳥の詩を詠んだのに踵を接して琵琶曲「啄木」の詩が出ており、兩者は地續きの關係にある。

以上のように見れば、北宋文壇における啄木鳥の社會的・政治的イメージの顕在化は、琵琶曲「啄木」が、大いに流行した背景への理解に繋がる。啄木鳥が比興の題材としての獨自性を確立し得るのは、樹を叩いて蟲をつつき出して餌とする特徴ゆえであるが、まさに同じ生態を音楽として表現したのが樂曲「啄木」である。

當時の文人社會における啄木鳥は、すでに單純な山林を自由に翔めぐる存在ではなく、往往にして政治の生々しい世界を寄託するシンボルとしての性格を帯びていた。そのような感覚を抱く人たちが敢えて好んで琵琶曲「啄木」を享受した事實からは、音楽自体への興味に加え、さらに結果として圖らずも時代的な危機感を體現した樂曲への、意識下あるいは無意識下での一種の共鳴を讀み取れるかもしれない。

五、歐陽脩「啄木辭」の構造分析

さて梅堯臣による啄木鳥の詩を、関連作品の流れのなかに置いたときに特筆すべきは、五絶「啄木」や「彼鷲吟」のように、従來型の「啄木鳥と蟲」との關係に、更に「人」という要素が加えられたことである。蟲相手には無敵の啄木鳥も、彈弓を手にした人間の前には無力である。「人」が加えられた構造は、その後も様様な發展を見せ、例えば南宋の王邁（一一八四—一二四八）「啄木鳥」では樹木を傷つける行爲を問責し、さらに苛斂誅求の酷吏の姿に重ね、このような輩こそ害鳥として「弋者」に撃ち落されてほしいと結ぶ³³⁾。

この「人」という要素が加えられた圖式の作品のなかで最も興味深いのは、歐陽脩「啄木辭」である。歐陽脩は、景祐三年の政變によって中央を逐われた時期に五古「猛虎行」³⁴⁾を書いたが、猛虎のみを主題

とする他の詩人とは異なり、罨を仕掛ける人間や、罨に掛かる虎を見てあざ笑う狐を出現させており、その構成が梅堯臣「啄木」や「彼鸞吟」に類するのは、相互的影響が考えられる。「啄木辭」の創作年代は不詳であるが、いずれにせよ梅堯臣との交流を通して成立したものと推測できる。

歐陽脩「啄木辭」は、宋代の啄木鳥關連の文學のなかでも最もダイナミックなスケールで描かれた力作であり、「啄木鳥」「蟲」「樹木」「木皇」「天帝」「人」などの役者がすべて出揃う。一篇を通じて「樹木」の保護という立場を中心に據え、内容は独自の方向性を打ちたてている。辭賦體の長編の作品であるため、以下では重要部分を區切りながら分析しよう。

木皇司春兮、物熙以春。芽者斯勾兮、甲者斯萌。物頼皇兮榮以欣、翳有蟲兮甚不仁。穴皇木兮群以聚、穴不已兮又加咀。皇木病兮窻將深、皇心惻兮傷爾蝮。彼鸞鳥兮善啄吾、利汝喙兮飢汝腹。飛以鳴兮啄且食、蟲不盡兮啄莫息。山之麓兮水之濱、皮堅節癭兮龍甲蛇鱗。節流膏兮吻流血、百不一兮徒飢渴。蠹日滋兮鸞日苦、京謁皇兮披雲路。雲之深兮不可見、託歸風兮仰訴。

木皇 春を司り、物 熙らぎて以て春なり。芽は斯れ勾し、甲は斯れ萌ゆ。物 皇を頼みて榮え以て欣び、翳に蟲有りて甚だ不仁なり。皇の木に穴つくり群れて以て聚まり、穴つくること已まずして、又た咀むを加ふ。皇の木病みて窻將に深からんとし、皇の心惻みて、その 蝮を傷む。彼の鸞鳥、善く吾を啄み、汝が喙を利くして汝が腹を飢えしむ。飛び以て鳴きて啄み且つ食らひ、蟲盡きずして啄むこと息む莫し。山の麓、水の濱、皮堅くし、節癭ありて龍甲蛇鱗のごとし。節は膏を流して吻は血を流し、

百に一ならずして徒に飢渴す。蠹日に滋くして、鸞日に苦しみ、京に皇に謁せんとして雲路を披く。雲の深くして見ゆ可からず、歸風に託して仰ぎ訴ふ。

冒頭部分の「木皇」とは五行の春を司どり、木徳の帝王である伏羲氏を指す語であるが、この詩では「木」の守護者の意味合いが強くなる。作品は、春になつて一齊に芽吹きはじめた生氣あふれる樹木から書き起こす。しかし「甚だ不仁」なる害蟲は樹を蝕み、木皇はそれを悲しんだ。ここで啄木鳥が登場し、「飛び以て鳴きて啄み且つ食らひ」と盡力するが、けつきよくは「節は膏を流して吻は血を流し、百に一ならずして徒に飢渴す」と努力は全て空回りし、蟲が減らぬばかりか、つづいた木の節からは樹液が流れ出し、嘴は傷ついて血を流す。苦しむ啄木鳥は、ついに木皇を天上界にまで訪ねるが、たちこめる雲に行く手を阻まれ、風にむけて空しく哀訴するばかりである。

帝何思之不熟兮、忽生般而與侮。丹髹之不巳兮、又以彫幾。斜鉤曲鬪兮、華照欄梯。高構嶮兮目精眩、地禿而赭兮山襟而寒。材者傷死兮生者力殫。一躬之庇兮一林夷族、寓龍木馬兮重闔陰屋、皇民暴嗇兮驅之以扑。

帝 何ぞ思ふことの熟せざる、忽に般を生じて侮と與にす。丹髹の已まざる、又た彫幾を以てす。斜鉤曲鬪、華やきは欄梯を照らし、高構嶮しくして目精眩み、地禿げて赭み、山襟にして寒く、材ある者は傷死し、生者は力殫く。一躬の庇、一林夷族せられ、寓龍・木馬、重闔・陰屋、皇の民は暴嗇にして、之を驅るに扑つを以てす。

是において人間があらわれるが、何と樹木に對して、蟲と啄木鳥に輪をかけた暴威を揮いはじめめる。天帝は何の叡慮あつてか、名匠「般

（魯班）「樞」を世に生まれさせたが、これは同時に豊かな森林が物づくりのために伐採されることを意味する。「丹髹」「彫幾」「斜鉤曲鬪」の豪華な木造建築のために、山は荒れて土砂は流出し、樹木が傷つくのみならず、生きとし生けるものが皆な罷弊する。一人の體を覆うために、「一林」が消滅し、木皇の民たるものが利益をとことん貪る。この作品のなかで明らかになったのは、「蟲」「啄木鳥」「人」の三者はともに「樹木」にとつて害をなす存在という事實である。

噫智巧兮誰爲是、既紛紛而不止。工蠹則大兮蟲蠹則小、捕小縱大兮將何謂。皇惜木兮雖甚恩、蟲利食兮啄徒勤、蠹末入口兮刃至其根。與其啄蠹能盡死、不如得啄匠手、使不堪於斧斤。

ち大にして蟲蠹は則ち小なり、小を捕へて大を縱つこと、將た何をか謂はん。皇木を惜しむこと甚だ恩ありと雖も、蟲食らふに利しくして啄むこと徒に勤む、蠹末だ口に入らずして刃、其の根に至る。其の蠹を啄みて盡く死せんよりは、如かず能く匠の手を啄むを得て、斧斤に堪へざらしむるに。

「人智」は最も狡猾であり、同時に足るを知らない。ゆえに人の手による「工蠹」こそが大問題であり、むしろ「蟲蠹」の害は小さく、抑も「小を捕へて大を縱」つような巨悪を見のがす状態は、言語道斷であると歎息する。

作品最後の「皇惜木」以下の六句は、同一部の韻を踏み、全體のまじめになっている。「木皇」は樹木を保護したいと思うが、「蟲」はどんどん食べ続け、「啄木鳥」の害蟲驅除はまったくの徒勞であり、そこに「人」の斧が迫る。もしも本當に樹木のために最悪の末路を回避したいのなら、啄木鳥は蟲など食べている場合ではなく、いつそ樵夫

の手をついばんで伐採を阻止すべきなのだ。長篇作品は、こう述べた一句を以て終わる。つまり木皇の仁心や、啄木鳥の身を粉にした努力自體は認めても、じつは問題解決にむけての根本的 Directionality こそが間違いであるとして警鐘を鳴らす。

歐陽脩「啄木辭」では、啄木鳥を主題とした作品のなかで初めて、最も横暴をきわめる「人」の存在が打ち出された。この新しい視點が詩壇において及ぼした影響は處處に見られ、ほぼ同時期の人物である呂南公（一〇四七？—一〇八六）の「代木工言」^⑦は、この歐陽脩「啄木辭」の内容を受けて樵夫が辨明する作品である。また黃庭堅の父である黃庶（一〇一九—一〇五八）の五古「賦古佛」^⑧の最後に「木蠹罪豈大、付與啄木權。胡不啄佛徒、使蠹民之天〔木蠹の罪豈に大ならんや、付與す啄木の權。胡ぞ佛徒を啄み、民の天を蠹ましめざる〕」と詠まれるのは、啄木鳥の本當に啄むべき「蠹」は、じつは民の食物を「蠹」む無爲徒食の僧侶という主張である。元凶たる「人」をこそ啄めと述べて筆を擱くところには、或いは影響關係が推定できよう。

このように樹を伐る行爲が悪として認定される「人」であるが、もとを正せば工匠は「帝」の命によつて生まれた存在であると、最初から述べられる。また「啄木鳥」が樹液が流れ出すほどに樹を痛めつけても、じつは職務に忠實なだけであり、自身も弊害を認識して天界の「木皇」を尋ねている。「蟲」はたしかに悪であるが、大局から見れば小事である。善悪の設定も、じつは「帝」「木皇」「啄木鳥」「蟲」「樹木」「人」の各自の立場が複雑に交わるなかでの相對基準に過ぎず、歐陽脩の「啄木辭」は單純な勸善懲惡の圖式を遙かに乗りこえ、何らかの寓意の詩として様様なドラマを讀みとることが可能である。

企圖したことが眞逆の結果となり、善意が良い結果を生むとも限ら

ず、諸悪の根源はけつきよく何に求めるべきなのか。こうしている間にも、木はどんどん伐られ、森林は削られ、啄木鳥は無益有害な努力を續けてゆく。收筆の句における「啄木鳥が樵夫の手をつつけばよい」という一時逃れに過ぎない提言こそが、つまりは樹を守るための抜本的解決案が見当たらない現実を突きつけている。

六、李廌「啄木鳥」における啄木鳥への反感

梅堯臣の作品によつて啄木鳥は、明確な政治諷刺の色彩を帯びるようになった。そして啄木鳥をめぐる問題点を集大成した觀を呈する歐陽脩「啄木辭」の内容は、複雑にして解決策なき混沌状態の提示であった。つまり當時の文壇の領袖たる歐梅によつて、啄木鳥に刻印されたイメージは、人間社會の矛盾に満ちた營みの反映といえる。

このようなイメージの啄木鳥について冷めた目で見る態度が生まれるのは、ある意味では當然の流れかもしれない。蘇門六君子の一人である李廌（一〇五九—一一〇九）は、「啄木鳥」と題する五古を残している。李廌は弱年にして東坡に文才を認められながらも、終には科擧に合格できずに一生を終えた不遇の才子であった。つまりは政争とは極めて近距離ながらも、あくまで傍觀者の位置にあつた。詩は樹木を食い荒らす「蟲」の描寫から始まる。

小蟲蠹堅木　小蟲堅木を蠹む
自意吻頰剛　自ら意ふ吻頰剛しと
蟠身宅幽竇　身を蟠らせて幽竇に宅まひ
心期千歲藏　心は期す千歲に藏るるを
爾非虎而翼　爾は虎にして翼あるにあらず
何乃巧取將　何ぞ乃ち巧みに取り將つや

北宋文學における啄木鳥

剥啄繞樹腹　剥啄して樹の腹を繞り
卷舌利鈎芒　卷舌鈎芒より利し
一身禍衆命　一身衆命に禍あし
曾未厭飢吭　曾て未だ飢吭を厭かしめず
流怨入胡琴　流怨胡琴に入り
美人借餘商　美人餘商に借る
鸚鵡相唱和　鸚鵡相ひ唱和し
次第歌芬芳　次第に芬芳歌む
吾生獨何事　吾が生獨り何事ぞ
有喙三尺長　喙の三尺長さあり
富歲常苦飢　富歲常に飢に苦しむ
不能饜糟糠　糟糠にも饜くこと能はず
寧飢忍效汝　寧ろ飢うるとも汝に效ふに忍びんや
豈復思隨陽　豈に復た陽に隨ふを思はんや
六句目の「取將」は蟲を取る意であり、助動詞の「將」は、韓愈「調張籍」でも韻字。冒頭から四句にわたり、「小蟲」が樹のなかに姑息な安逸を貪る姿を描き、「心は期す千歲に藏るるを」という儂き願望を述べ、その後に啄木鳥が登場する。飛び巡つて獲物を探し、鋭い嘴を持ち、恐るべき殺傷能力を有し、「一身」のために「衆命」を奪う。下の句がすぐに「曾て未だ飢吭を厭かしめず」と續くのは、欲望の虜となつた醜悪きまわる姿である。

次の「流怨胡琴に入り、美人餘商に借る」の一句から、突如として文脈が變わる。「胡琴」とは琵琶の異稱であり、當時流行の琵琶曲「啄木」を指す。先程までの食うか食われるかの残忍な世界から、突然「美人」の奏でる音樂の場面へと急展開させ、えもいわれぬ凄美な

る雰圍氣を醸し出す。ここで「啄木」の曲に唱和し始める「鶉鳩」とは鳥の名であり、もとは「離騷」のなかで草花の芳しき時期の終わりを告げる鳴聲であると言及され、また阮籍の五言「詠懷（其九）」でも「哀音」を發すると詠まれる。この李廌の詩のなかで生じた「美人」の馨しき仇花も同じように萎みゆき、舞い散る定めである。本詩は、宋代の琵琶曲「啄木」の關連作品のなかで最も沈鬱な内容といえる。

ここで登場するのが「獨り何事ぞ」と嘆く「吾」である。詩中に登場するのは「蟲」「啄木鳥」「吾」の三者であるが、この「吾」が、「爾」あるいは「汝」という二人稱を用いて呼びかける相手は啄木鳥のみであり、一篇の構造としては「吾」と「啄木鳥」とが直接對峙する關係性が仕組まれる。

次の句「有喙三尺長」は典故としては『莊子』「徐无鬼」に見える孔子の語であるが、唐宋の詩では「大きな口」という意味で様様に用いられ、ここでも多義を持ち得る。まずは己が言葉を用いるに巧みである意を含み、同時に啄木鳥の長い嘴に對應させつつ、もつとも直接的には大きな「喙」なのに飢餓に苦しむことを述べる伏線とする。世間が豊作の年さえも貧困の生活でありながら、「寧ろ飢うるとも汝に效ふに忍びんや」と、殘虐の限りを盡くす啄木鳥に倣うのを潔しとせず、また日和見主義でないのが、「吾」の生き方である。

本詩の啄木鳥は、すでに樹木を守るという大義名分は持たず、口腹の欲を満たそうと殺戮を重ねてゆく。これはまさに北宋以降の文壇において創りあげられたイメージへの反感からの産物である。李廌「啄木鳥」は言うなれば、將來への希望を託した王禹偁「啄木詞」の對極であり、魏野や歐梅の描きだした弱肉強食の世界の外に立ち、そして

詠物對象への自己の「拒絶」という方法によつて孤高の志を表わした作品として位置づけられる。

七、まとめ——「縮圖」としての啄木鳥

以上のように北宋の啄木鳥を主題とした文學は、啄木鳥が蟲を樹からつつき出す生態的特性を中心軸に據えつつ、既成のイメージを次つぎと塗りかえた。すでに存在する「型」を踏襲して何かを表現するのではなく、むしろ啄木鳥と蟲との關係という基本構造を自由に應用して「型」を打破するところに、多様な廣がりを生んでいった。

啄木鳥の生態的特性は、言うなれば蟲と啄木鳥との兩者の生きるか死ぬかの緊迫したやり取りであり、ゆえに文學の題材として用いられる場合にも、一種の深刻な重みを根底に秘めている。たとえば梅堯臣の詩には「百舌」「提壺鳥」「巧婦」「鳥」「雉」「白鷗」「子規」「竹雞」など多くの鳥が詠まれ、佳作も多い。しかし啄木鳥のみが反復して詠まれる理由は、その生態が本質的な意味において生々しい社會的・政治的隱喩の要素を多分に含み、獨特の緊張感にあふれた世界を描くのに最適の材料たり得たことが第一に挙げられる。

ここで(一)啄木鳥のイメージの展開、(二)登場者の關係構造の二點から、「啄木鳥文學」の全體を俯瞰し、そこから北宋文學での性質を讀み解こう。

(一) 啄木鳥のイメージの展開

初期の①高潔なる野鳥、②害蟲を取り除くという善なる存在から、やがては③害蟲を驅除しつつも同時に樹を傷つける害鳥としての二面性が明らかになる。そして④努力しているのに追い出されたり、他者に撃ち落とされたり、更には⑤何が善なのか悪なのか、

守るべきは何か、じつは目的と方法とが完全にズレているのではないか、という前提的価値観への懐疑が露わになり、⑥啄木鳥自身も苦しんで翻弄されている姿が表面化する。最終的には⑦啄木鳥に對して反感を表明する詩人も現われた。

このような被害者と加害者との立場が交錯し、絶對的善惡の觀念が崩壊し、相互矛盾が露呈する描き方には、杜詩の「縛雞行」が連想される。杜甫は、食べられてしまう「蟲蟻」を可哀そうだと思つて「雞」を市場で賣ろうとする家族の、行爲の矛盾に氣がつく。「蟲蟻」が助かるためには「雞」は死なねばならず、「雞」の生存とは「蟲蟻」の死を意味し、じつは人間はどちらか一方の死の選擇を迫られている。最後に詩人は「雞蟲得失無了時、注目寒江倚山閣（雞蟲の得失了る時なく、目を寒江に注いで山閣に倚る）」と、生命そして運命に思いを馳せるが、これと同様に啄木鳥と蟲との「得失」もまた永遠に結論の出ない問題である。勿論、杜詩の「雞蟲の得失」の内容設定は、個人の日常生活のなかの一コマである。また深刻な生命觀の有無という意味でも、この「縛雞行」と唐宋における啄木鳥のイメージの展開との間には直接的關連性は想定しにくい。しかし杜甫の示した多層的に物事を把握する視點が、それ以降の文人に刺激を與えたのは、啄木鳥をめぐる文學でも確認できる。

(二) 登場者の關係構造

次に作品中における登場者の關係構造という點から分析しよう。初期の西晉から北宋の歐陽脩に到るまで、單體としての「啄木鳥」への重視から、やがて「啄木鳥と蟲」↓「啄木鳥と蟲と樹木」↓「啄木鳥と蟲と樹と人」↓「啄木鳥と蟲と樹木と人と木皇

と天帝」のように、要素を複合的に増やしつつ發展している。

この發展圖式は、『莊子』「山木」や『說苑』「正諫」などの所謂「螳螂捕蟬、黃雀在後（螳螂蟬を捕へ、黃雀後に在り）」の寓話が影響しているだろう。『莊子』であれば「蟬↓螳螂↓異鵲↓莊周↓虞人」であり、『說苑』では「蟬↓螳螂↓黃雀↓少孺子」という順に、狙う側が忽ちに狙われる側となり、關係性は不斷に轉變する。たとえば前者では「蟬」を食べた「螳螂」は「異鵲」に食べられ、「莊周」は「異鵲」を彈弓で撃ち落とそうとして「虞人（森の番人）」に追われるが如くである。相互の力關係は絶對的ではなく、思いがけない存在の突如の出現によつて脆くも打ち碎かれ、下位者は上位者の餌食となる。

啄木鳥をめぐる相互關係もまた一時的に内部完結するだけである。新たな登場者の擡頭によつて逐う者が逐われ、守護者が破壊者となり、破壊者が守護者と化すという有爲轉變が、浮き彫りになっている。

北宋文壇においては(一)の③から⑦までの要素が絡み合う。また(一)の④以降、および(二)の「人」の出現から後は北宋独自の發展である。このような文學的展開の擔い手は、使命感に満ちた「啄木詩」を詠んだ王禹偁であり、魏野「啄木鳥二首」を「規戒」であると認定して評價した司馬光であり、そして「啄木辭」の歐陽脩であり、みな要職を占める政客であった。梅堯臣もまた歐陽脩の莫逆の友として時勢の危うさを肌で感ずる立場であった。

言うなれば「啄木鳥文學」は、作者たち自身が巻きこまれた政治史の「縮圖」である。景祐・寶元・慶曆の政治變革を経た政界は、やがて熙豐以降には新舊二黨の派閥による本格的な混亂の時代を迎える。

北宋の朝廷内では「蟲」と「啄木鳥」との攻防戦という狭い世界が成り立ち、お互いを「樹木」を傷つける元凶として非難に終始していた。しかし、まさに歐陽脩「啄木辭」では斧斤を揮う「人」の脅威が説かれたように、その後で大舉して南下した金人は、宋の朝廷という大樹を切り倒してしまった。朋黨どうしの内部抗争として完結していったはずの力學構造が、外的壓力によつて崩壊した時、歐陽脩「啄木辭」は、作者の夢想だにせぬところで極めて正確な預言として成就した。

「啄木鳥文學」が北宋政治史の「縮圖」であるということは、文人における比興の寄託が、より己の生きる現實世界の複雑性に即した方向性を模索していたことを意味する。じつは北宋後期には啄木鳥をめぐる文學的展開が下火になつていく。これは先ずは烏臺詩案などの文字の獄の頻發により、あまりに政治・社會的イメージを帯びた詩材「啄木鳥」が忌避されたためであろう。そして、より根本的には一權集中化した政界が、啄木鳥の生態に相似した「黨争」という構造から乖離したことが原因として考えられる。社會の「縮圖」であるが故に、社會構造が變化すれば、題材そのものが表舞臺から退場する。

しかし、北宋文人が「縮圖」のなかに表現し得たものは、限定された特定の時代背景をはるかに陵駕する。善意・努力の空回りや、目標と現實との反比例、善惡の價值觀の變動性などは、人間社會への根本的な諷刺あるいは警告たり得るだけの奥ゆきを備えている。文人たちによる社會生活との一體化を追い求めた創作行爲は、結果として啄木鳥の比興の方法においても多様な意象を形成し、その表現の可能性を極限にまで高めたといえる。

注

- (1) 宋代の類書である陳元靚『歲時廣記』卷二三「得啄木」や高承『事物紀原』卷十「蟲魚禽獸部」などに引く『古今異傳』。
- (2) 『淮南子』「說山訓」に「斲木愈齧」、『抱朴子』内篇「對俗」に老子の言として「啄木之護齧齒」とある。例えば『太平聖惠方』記載の齧齒を治す「啄木散」には啄木鳥の舌を用いるように、實際に藥材とした。
- (3) 彭乘『墨客揮犀』卷二、李石『續博物志』卷六。
- (4) 牛衷増『增修埤雅廣要』卷三五「文物門・鷺書印字」。
- (5) ともに『藝文類聚』卷九二「鳥部下・啄木」上海古籍出版社、一九九九年、一六〇四頁。
- (6) 後世の選集などでは「左氏」を左棻（？—三〇〇）と見なすものもあるが、遼欽立が『先秦漢魏晉南北朝詩』の校記に述べるように別に確證はない。
- (7) 後世この方向性で詠まれる詩は多くはないが、たとえば南宋の王質（一一二七—一一八九）「啄木兒」では「啄木兒、啄木兒、壁壁剝剝尋幽期。山樊深淨眠睡熟、樹聲忽鳴林葉飛。輕蹙蹙、重督督、山風槭槭聲漉漉。嗚呼此友兮誠相知、樹林要深不要稀」（王質『紹陶錄』卷下、十萬卷樓叢書本）と、啄木鳥の悠悠自適な生活のみを詠み、同時に親近感を示す。
- (8) 孔延之『會稽掇英總集』卷十五、四庫全書本。
- (9) 元稹『元氏長慶集』卷二五、四部叢刊本。
- (10) 白居易『白氏長慶集』卷二、四部叢刊本。
- (11) 楊萬里の七絶「省中見樹上啄木鳥戲題」に「一啄高高一啄低、一聲聲急一聲遲。可憐去盡勞心口、蟻入枯梨自不知」とある（『誠齋集』卷二二、四部叢刊本）。また宋末の黎廷瑞（一二五〇—一三〇八）の「啄木辭」（『芳洲集』卷三）も類似の内容といえる。

- (12) 『文苑英華』では朱慶餘「啄木兒」（『萬首唐人絕句』では「啄木鳥」とするが、『唐詩紀事』『事文類聚』では陳標「啄木謠」とする。
- (13) 齊己『白蓮集』卷十、四部叢刊本。
- (14) 王禹偁『小畜集』卷十三、四部叢刊本。
- (15) 黃庶『黃青社先生伐壘集』卷上、明刻本（中國基本古籍庫版本對照）。
- (16) 韓琦『安陽集』卷一、正德九年張士隆刻本（中國基本古籍庫版本對照）。
- (17) 魏野『東觀集』卷九、宋紹定元年嚴陵郡齋刻本（中國基本古籍庫版本對照）。
- (18) 何文煥『歷代詩話』、中華書局、二〇〇四年、二七六頁。
- (19) 薛季宣『浪語集』卷八、四庫全書本。
- (20) 丁福保『歷代詩話續編』中華書局、二〇〇六年、一七八頁。
- (21) 治平中、有吉州吉水令、忘其姓名、治邑嚴酷。有野人馬道、爲啄木詩諷之曰……令見其詩、稍緩刑。時人目曰「馬啄木」（『詩人玉屑』卷九「啄木詩（『翰府名談』）」、中華書局、二〇〇七年、二七九頁。「詩話總龜」卷一・彭乘『墨客揮犀』卷十にも互見。詩の部分は、本文に掲載。
- (22) 梅堯臣の作品本文および繫年は、みな朱東潤『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）に従い、本文に卷數のみを示す。
- (23) 郭紹虞『宋詩話輯佚』文泉閣出版社、一九七二年、一四四頁。
- (24) 王闢之『洩水燕談錄』卷二「名臣」。
- (25) 朱東潤『梅堯臣集編年校注』上海古籍出版社、二七六頁注。
- (26) 『詩話總龜』卷三七「譏諷門」に載せる『詩史』、史季溫、山谷別集詩注「卷下「觀祕閣蘇子美題壁及中人張侯家墨跡十九紙率同舍錢才翁學士賦之」に引く「詩話」などに見える。
- (27) 事件の具體的經過については『資治通鑑長編』卷一五三に詳しい。
- (28) 梅堯臣は、詩の内容によつては公表に慎重であつた。魏泰『東軒筆

北宋文學における啄木鳥

- 錄』卷七には、梅堯臣が物議を醸しそうな「書竄」詩を敢えて人に示さず、歐陽脩による文集編纂時にも収録されなかつたとある。「李舍人淮南提刑」もまた秘された作品であつたかもしれない。
- (29) 歐陽脩「湖州長史蘇公墓志銘」（『歐陽脩詩文集校箋』上海古籍出版社、八三六頁）。
- (30) 琵琶曲「啄木」については、拙稿「琵琶曲『啄木』攷——宋代文人の聞いた音楽」（『東方學』第一三六輯、二〇一八年七月）を参照されたい。
- (31) 洪本健『歐陽修詩文集校箋』上海古籍出版社、二〇〇九年、一九〇頁。
- (32) 司馬光『溫國文正司馬公文集』卷三、四部叢刊本。
- (33) 王邁『驪軒集』卷十三、四庫全書本。
- (34) 洪本健『校箋』一五三一—一三三頁。
- (35) 洪本健『校箋』二—三頁。
- (36) 歐陽脩「啄木辭」の制作年代は、洪本健が『校箋』注（一）で述べるように不詳であり、李之亮『歐陽修集編年箋注』（巴蜀書社、二〇〇七年）に皇祐四、五年（二〇五二—三）の作とするのは根據不明。
- (37) 呂南公『灌園集』卷四、四庫全書本。
- (38) 黃庶『伐壘集』卷上、明刻本（中國基本古籍庫版本對照）。
- (39) 李膺『濟南集』卷三、四庫全書本。
- (40) 李膺『曉發鄆城和德麟韻』（『濟南集』卷二）でも「絲蓴茗雪鱸、欲飽三尺喙」と、食に關連した「口腹」という意味で同じ典故が用いられる。

本稿は、令和元年五月十八日、金澤大學にて舉行された「日本宋代文學學會第六回大會」の口頭発表をもとに加筆修正したものである。執筆期間中、有益なる御意見を賜つた各位に對し、改めて深甚の謝意を表す。